岩手県における里地型市町村の景観形成基本計画の分析

—日本人の原風景、里地景観の保全と創造に関する基礎研究—

The Analysis of Landscape Master Plans of Satochi-Type Towns in Iwate Prefecture
—A Fundamental Study on the Conservation and the Rearing of the Landscape
of Satochi which is the Primitive Image of Japanese—

佐々木 貴弘*・安藤 昭**・赤谷 隆一**・佐々木 栄洋**

Takahiro SASAKI, Akira ANDO, Ryuichi AKATANI and Yoshihiro SASAKI

I はじめに

1 本研究の目的

長い歴史の中で、日本人の生活に密接に結びついて親しまれてきた地域が里地である。雑木林や棚田、のどかな農村風景など、自然環境や風土文化を生かした里地景観は、日本人の原風景ともいえるべきものであろう。そして、その原型は、村落の一定の空間領域として福田¹⁾が指摘するところの、1) 定住地としての領域であるムラ、2) 生産地としての領域であるノラ、3) 採取地としての領域であるヤマの三領域によって構成されるものと考えられる。つまり、集落に田圃里山が一体となって形成されている空間こそが里地であり、里地の魅力、里地らしさは、人と自然とが包括された総合的環境にあるといえる。したがって、里地景観を論じるにあたって、ムラ、ノラ、ヤマの三領域を包括したトータルデザインと、身近な周囲の自然環境を肌で感じ取ることができる五感性が論点となるものであり、従来論じられてきた景観計画論の観点では、里地景観を保全し、創造していくためには十分とはいえない。

また、里地に関する既往研究は、土地利用構造や動植物の生態系の面からアプローチした研究は数多くみられるものの^{2)~5)}、里地の文化現象の総体、つまり里地景観^{注1)}について論じた研究は少

ない。特に、里地景観形成の今後の指針となる景観形成基本計画^{注2)}の分析を試みた研究は少なく、実際、里地地域において景観形成計画がどのように策定されているのか、その把握が十分ではない。

そこで本研究では、このような背景のもとに、里地景観の保全と創造のための基礎研究として、岩手県全市町村の中から里地地域に位置する市町村（里地型市町村）を抽出し、その景観形成基本計画の実態の把握と課題の探索を目的とした。具体的には、岩手県の里地型市町村において、どのような景観基礎調査や景観基本目標の設定が行われているのか、身近な雑木林や棚田などを含む里地の自然環境や風土文化を生かした里地らしさを表現する景観として魅力的な施策は策定されているのか、景観推進方策についてはどうであるのか、についてを明らかにしようとするものである。

2 本研究の対象と方法

岩手県では、1993年10月に「岩手の景観の保全と創造に関する条例」を制定した。県民が誇りと愛着を持つことのできる美しい県土の実現をうたったこの条例では、市町村の責務として景観形成基本計画の策定を定めている。

1993年度以前に岩手県内で景観形成基本計画の策定を行っていたのは、1989年度策定の盛岡市をはじめ4市村のみであったが、この条例を契機に、1997年度までに県内全59市町村が景観形成基本計

* 岩手大学大学院工学研究科 Grad. School of Eng., Iwate Univ. 4-3-5, Ueda, Morioka, Iwate Pref.

** 岩手大学工学部 Fac. of eng., Iwate Univ. 4-3-5, Ueda, Morioka, Iwate Pref.

Key Words: 1) 景観形成基本計画, 2) 里地, 3) 保全と創造

画を策定することとなった。盛岡市を除く58市町村の人口は全て10万人以下であるが、安藤ほか⁶⁾が1994年に行なった全国の主な都市を対象とした調査では、人口10万人以下の都市における景観形成基本計画の策定率が35.7%であったことを考慮すると、岩手県のこの取り組みは全国的にみても先進的な試みであるといえよう。

本論では、景観形成に先進的な取り組みを見せる岩手県全市町村を対象として、里地自然地域に位置する市町村を里地型市町村として定義し、その景観形成基本計画についての分析を行う。なお、分析項目は、1) 景観基礎調査方法について、2) 景観形成基本目標について、3) 景観形成施策について、4) 景観形成推進方策についての4項目とし、計画書に明記されている内容を集計対象とした。

Ⅱ 里地型市町村の定義と抽出

1 里地型市町村の定義

一般に里地という言葉には、大自然と対比しての「人の住むところ」という面と、高度に発達した都市に対比しての「田舎」という面が含まれ、その外縁ははっきりしたものではない⁷⁾。

しかし、1996年に行った里地自然地域等自然環境保全調査⁸⁾では、山地自然地域、里地自然地域、平地自然地域の3つの陸域について、定量的な分類を試みている(表1)。このなかで里地自然地域については、「人口密度50人/㎤未満かつ森林率80%以上の地域(山地自然地域)と、人口密度300人/㎤以上の地域(平地自然地域)に該当しないそれ以外の地域」としており、本研究における里地自然地域、山地自然地域、平地自然地域の定義も表1に準ずるものとした。さらに、この定義に

表1 里地自然地域等自然環境保全調査による陸域の分類定義

Table1 Group definition of land area by basic survey on natural environment conservation of Satoshi natural area etc.

分類	定義
山地自然地域	人口密度50人/㎤未満、かつ森林率80%以上
里地自然地域	山地自然地域及び平地自然地域以外の地域
平地自然地域	人口密度300人/㎤以上

表2 山地型・里地型・平地型・沿岸地域市町村の分類(岩手県全市町村)

Table2 Group of Mountainous-type, Satoshi-type, Flat land-type and coastal-type by all cities, towns and villages in Iwate Prefecture

市町村名	人口 ¹⁾ (千人)	総面積 ¹⁾ (㎤)	人口密度 ¹⁾ (人/㎤)	森林率 ²⁾ (%)	山地 型	里地 型	平地 型	沿岸 地域
盛岡市	281,712	489.15	575.92	70.26			○	
宮古市	56,406	339.40	166.20	85.50				○
大船渡市	37,422	186.02	201.17	82.82				○
水沢市	59,531	96.92	614.23	24.29			○	
花巻市	71,848	385.40	186.42	58.93		○		
北上市	88,304	437.55	201.81	53.51		○		
久慈市	38,629	327.61	117.95	81.78				○
遠野市	28,530	660.38	43.20	81.59	○			
一関市	62,484	410.23	152.31	63.20		○		
陸前高田市	27,546	232.19	118.64	81.95				○
釜石市	49,729	441.24	112.70	88.37				○
江刺市	34,954	362.50	96.42	54.91		○		
二戸市	28,381	240.61	117.95	70.52		○		
雫石町	19,551	609.01	32.10	75.87		○		
葛巻町	9,961	434.99	22.90	84.95	○			
岩手町	18,409	360.55	51.06	75.90		○		
西根町	19,328	167.16	115.63	49.89		○		
滝沢村	44,302	182.32	242.99	42.09		○		
松尾村	7,177	234.85	30.56	66.11		○		
玉山村	14,472	397.32	36.42	76.60		○		
紫波町	31,813	239.26	132.96	58.33		○		
矢巾町	22,389	67.28	332.77	24.57				○
大迫町	7,624	246.61	30.92	84.30	○			
石鳥谷町	16,649	118.57	140.41	48.04		○		
東和町	11,389	157.51	72.31	62.19		○		
湯田町	4,418	304.56	14.51	83.20	○			
沢内村	4,381	286.22	15.31	80.35	○			
金ヶ崎町	16,172	179.77	89.96	38.64		○		
前沢町	15,550	72.34	214.96	30.91		○		
胆沢町	18,201	298.02	61.07	59.04		○		
衣川村	5,652	163.57	34.55	79.73		○		
花泉町	16,862	126.83	132.95	38.90		○		
平泉町	9,491	63.39	149.72	48.81		○		
大東町	19,141	278.71	68.68	71.98		○		
藤沢町	10,989	122.82	89.47	59.65		○		
千厩町	14,217	89.84	158.25	54.69		○		
東山町	8,963	87.72	102.18	69.63		○		
室根村	6,701	97.28	68.88	71.55		○		
川崎村	5,040	42.49	118.62	58.37		○		
住田町	7,899	334.83	23.59	88.99	○			
三陸町	8,864	137.15	64.64	83.57				○
大館町	19,080	200.47	95.18	88.56				○
宮守村	5,822	165.24	35.23	80.17	○			
田老町	5,202	101.05	51.48	87.19				○
山田町	22,738	263.41	86.32	90.27				○
岩泉町	14,506	992.90	14.61	91.41				○
田野畑村	4,942	156.19	31.64	86.62				○
普代村	3,748	69.65	53.81	86.73				○

資料：1) 岩手県 (1996)「平成8年度版全国市町村要覧」

2) 農林水産省 (1990)「世界農林業センサス 岩手県統計書」

基づく3つの陸域（山地自然地域，里地自然地域，平地自然地域）に加え，その地理的地形的条件により生活文化の源泉を海におく沿岸地域を，新たに分類のカテゴリーとして加えた。

以上のことから，本研究では，福田のいうムラ，ノラ，ヤマが混在する地域を里地自然地域と仮定し，里地型市町村の定義を「里地自然地域に位置する内陸部の市町村」とした。その他，山地型市町村については「山地自然地域に位置する内陸部の市町村」，平地型市町村については「平地自然地域に位置する内陸部の市町村」，沿岸地域市町村については「陸域と海域の両方にまたがる地域に位置する市町村」とした。

2 里地型市町村の抽出

前掲の定義より岩手県全市町村を，山地型市町村，里地型市町村，平地型市町村，沿岸地域市町村とに分類を行った。この結果，岩手県59市町村は，山地型11，里地型31，平地型3，沿岸地域14の市町村に分類された（表2）。

このことより，岩手県全市町村は，沿岸地域を除くとその7割近くが里地自然地域に位置することが分かる。本研究は，この里地自然地域に位置する31の里地型市町村の景観形成基本計画について分析の対象とした。

Ⅲ 分析結果

1 景観基礎調査方法について

景観基礎調査には，風土イメージの分析と景観の分類と評価が必要である。その調査方法には，安藤ほか⁹⁾による再生法や再認法を用いた視覚的イメージ調査と言語を用いたコンテキスト系イメージ調査が挙げられる。主体と対象の関係性を客観的に把握するという観点から，景観基礎調査は，より住民のイメージを反映させた再生法などによるイメージ調査が望ましく，その補助的作業として住民意識調査との併用が考えられる。また，自由想起法は，単に「好きな景観」「美しい景観」等を挙げてもらう簡潔な調査法であるが，景観資

図1 景観基礎調査の区分と実施率

Fig.1 Classification and percentage of data survey of landscape

源の構造的な把握に関して十分な調査法とはいえない。そのため，自由想起法により抽出された景観資源をさらに分類・評価するような構造的な解析が必要である。その他，イメージ調査とは別に，景観に関する一般的な問題意識等を扱う住民意識調査も景観基礎調査法の一つとして挙げられよう（図1参照）。

各市町村で行われていた景観基礎調査の実施率を図1を見ると，住民イメージ調査の実施手法には偏りが見られた。視覚的イメージ調査では，再生法であるメンタルマップ法で3.2%，再認法に至っては，調査例は全くみられない。コンテキスト系イメージ調査は，自由想起法が67.7%と多くの市町村で調査が行われていたものの，制限連想法は3.2%のみである。また，上記以外のその他の手法による調査例も見られなかった。

前述の通り自由想起法では，抽出された景観資源をさらに分類・評価するような構造的な解析が必要であるが，その調査例はほとんど見られない。景観基礎調査の実態と課題はここに指摘されよう。このことから，景観資源の構造的な解析手法によるイメージ調査の実施とともに，その定着が望まれる。

一方，住民意識調査は74.2%と多くの割合を占めたが，この調査はイメージ調査とは性質を異にするものである。あくまで，景観基礎調査の補助的な調査として位置付けるべきであろう。

なお，里地景観を論じる際に重要であると考えられる，五感性に配慮した景観形成に関わる基礎調査は，わずか3.2%で快適音や香りについての調査を行っていたのみであった。

2 景観形成基本目標について

各市町村の景観形成計画の意図するところを，

それぞれの基本目標からキーワードを抽出し、単純なデータ構造化を行なった。その例を図2に示す。

まず、はじめに基本目標を要約し共通の形式(「〇〇を△△する」)に整える。この際、1つの文章中に現れる複数の目標は、個々に分割して要約・整形することに注意した。次に、整形されたデータから意味を持つ最小単位の単語を、単位キーワードとして抽出した(上記の〇〇部分)。なお、キーワードが複合的な単語から成る場合は、その意味を考えながら分割するかしないかを判断した。例えば、図2の例では「歴史的建造物」が独立したキーワードとなっているが、これは「歴史的」という語句で初めて関連づけられるキーワードで

あるため、分割には適さない。そして、最後に抽出した単位キーワードをグループ化しグループ名を付け、分類、区分へと集約していくことにより、最終的に統計結果を総合的に判断するものとした¹⁰⁾。キーワードを集約していく過程では、里地景観形成にあたっての特徴として端的に表すことができるよう留意してKJ法により作業を進めた。

図3は、各市町村の基本目標をこれより構造化したものである。この結果、分類は「風土文化」「心象風景」「個性」「居住環境」「潤い」「快適性」「叙情性」「住民参加」「生活感」「コミュニティ」「生物的環境」の11分類を数えた。さらにこの分類をまとめることによって、各市町村の基本目標は「里地らしさ」「里地の快適さ」「里地地域の共同体意識」「生物的環境」の4つの区分に集約される。

各分類を構成するキーワード数では、特に「生物的環境」(37語)が多く、里地の景観形成にあたっての生物的環境との密接な関係を表している。さらに区分別のキーワード数の合計で見ると、「里地らしさ」の合計83語(「風土文化」31語/「心象風景」28語/「個性」24語)が全体の45.9%を占め、群を抜いて高い。このことから、風土文化、心象風景を代表とする「里地らしさ」の創

造が、里地における景観形成のテーマと考えられる。この「里地らしさ」を前面に押し立てた目標例として、「ふるさとを感じさせる田園、文化を継承し、新たな魅力をつくる」(東山町)などが挙げられる。また、次いで「里地の快適さ」のキーワード数が全体の25.4%と多いことから(「居住環境」17語/「潤い」12語/「快適性」9語/「叙情性」8語:合計46語)、里地らしさの創造による個性表現の一方で、総合的な生活環境の向上が指向されていることが分かる。その目標例として、「健康で快適な生活環境を創造する」(胆沢町)などが挙げら

図2 基本目標のキーワード構造化の統計処理フロー
Fig.2 Flow the structuring keywords of fundamental object of landscape planning

図3 景観形成基本目標のキーワード構造化図

Fig.3 Keywords structure of fundamental object of landscape planning

Fig.4 Percentage of measure of landscape planning

れる。

なお、各市町村の景観形成基本目標の設定にあたって、前節の景観基礎調査方法との関連した記述は見られず、目標の設定が根拠あるものなのか不明であった。

3 景観形成施策について

景観形成施策の策定率について、前節の基本目標の区分を参考に、(a)里地らしさの創造、(b)里地の快適さの追求、(c)生物的環境の保全について、3つのテーマ別に分類した(図4:策定率10%以上のみ)^{注3)}。なお、基本目標の区分の一つである『里地地域の共同体意識』に関わる施策については、景観構成要素を計画対象とする景観形成施策というより、むしろ主体である住民等を対象とする景観形成推進方策にあたることから、次節で言及するものとした。

(a)里地らしさの創造については、「歴史的要素の保全・活用」と「心象風景の要素の保全」に関わる施策が多い。前者では、「歴史的建造物等の保全・活用」(38.7%)や「宗教建築物(社寺等)の保全・活用」(25.8%)といった施策が、後者では、「農村風景の保全」(45.2%)や「名木・大木等シンボル樹木の保存・活用」(32.3%)といった施策が高い値を示した。「伝統行事・伝統芸能の継承」(19.4%)などのように特定の有形資源を対象としていない施策も見られ、建造物などの歴史的遺産に加え、風土文化や人の心的側面からアプローチした施策も重視される傾向にある。なお、表中には示していないが「自然観察場の整備」(6.5%)や「地元産業の体験場の整備」(6.5%)など、グリーンツーリズムやエコツーリズムに対応する施策は少なかった。五感性に配慮した音や香りを対象とした施策に関しても、「小鳥のさえずりや香りへの配慮」や「鐘の音・あいさつが聞こえる環境づくり」(ともに9.7%)が見られたのみであった。

(b)里地の快適さの追求では、「街路樹の整備・沿道植栽」(51.6%)や「生け垣・屋敷林による緑化」(48.4%)など、「緑化」に関わる施策が目につく。水路沿いオープンスペースの活用といった「親水性を高める」(67.7%)などの“親自然

場の整備”注4)に関する施策や、「ポケットパークの整備」(48.4%)などの“オープンスペースの創出”に関わる施策も多く、より自然を身近に捉えたゆとりある空間の創造が求められていることが分かる。一方で、「電柱・電線・架線の埋設・隠蔽」(45.2%)や、「広告・看板の整理・デザイン化」(38.7%)などの“景観阻害要素対策”も多く見られ、近年無秩序に進む景観破壊問題を反映しているといえよう。

(c)生物的環境の保全では、「山林・樹林の保全」(45.2%)や「農業緑地の保全」(32.3%)が高い策定率を示したことから、既述の「ヤマ」「ノラ」に相当する領域の保全が課題に挙げられていることが分かる。また、「水辺の保全」(35.5%)や「多自然型護岸による護岸の整備」(32.3%)、「水質の浄化」(29.0%)など、水辺の自然性の確保に関わる施策も多い。その他、「建築物等の周辺環境と調和した配置・形態」(54.8%)や「社寺林・屋敷林の保全」(35.5%)、「屋根の色彩・勾配・形態の配慮」(32.3%)など、「ムラ」と自然環境との調和を目的とした施策も多くなっている。ただし、景観形成基本目標・景観形成施策において、三領域の一体性について明示していた例は少なかった。

4 景観形成推進方策について

景観形成推進方策とは、前節で挙げた景観形成施策を実施していくための方法論的施策を指す。景観形成施策が景観構成要素を計画対象としているのに対し、景観形成推進方策は主体である住民等を計画対象とする。これらの景観形成推進方策を、その主体別に3分類し、「住民に対する施策」「行政面における施策」「企業に対する施策」として示した(図5)。

「住民に対する施策」を見ると、“住民意識の向上のために”に関する施策数が多く、策定率も高い。「広報・PR活動の実施」(74.2%)や「コンクール・イベント等の実施」(64.5%)など行政側の働きかけによる施策が中心となっている。一方で“住民意見の反映のために”に関する施策は少なく、「住民との懇談会・ワークショップ等の開設」と「住民の意見・アイデアの募集」の

図5 各景観形成推進方策策定率
Fig.5 Percentage of measure of pushing on with landscape planning

みが2桁の策定率を示しただけであった(ともに22.6%)。以上のことから、住民参加を考えた場合、あくまで行政主導型の施策が中心であり、また、「関心を持っても具現化する場がない」といったバランスの悪さが目に付く。

次に、「行政面における施策」を見ると、“景観形成のモデルとして”の施策が多く、「ガイドラインの策定」(64.5%)や「重点地区の指定」(48.4%)など、景観形成にあたってのマニュアル化、あるいはモデル化が図られているものと考えられる。効率的な景観形成推進に有効な手法と考えられるが、反面、景観形成が画一的・局地的に陥るおそれがあるため、施策の実施にあたっては十分な検討が望まれる。また、“景観形成推進のための支援として”の「市町村景観条例の制定・活用」

(58.1%)が高いことから、景観形成にあたっての積極的な規制がみられる。

なお、「企業に対する施策」については、「事業者への景観指導」(25.8%)が最も高い値を示したが、全般に策定率は低く、施策数も少なかった。

IV まとめ

本研究は、田園里山を多く含む日本人の原風景、里地景観の保全と創造のための基礎的研究として、岩手県全59市町村の中から里地地域に位置する31市町村(里地型市町村)を抽出し、その景観形成基本計画の実態の把握と課題の探索を目的として行ったものである。

本研究で得られた里地型市町村の景観形成基本計画の実態を要約すると、以下のように示される。

1) 景観基礎調査では、住民に対するイメージ調査が自由想起法で67.7%と多くの市町村で実施されていた。しかし、その他の調査例がほとんどみられないことから、景観資源の構造的把握が十分ではないと考えられる。

2) 景観形成基本目標のキーワードでは、『里地らしさ』に関するキーワード数が全体の45.9%を占め、次いで『里地の快適さ』が25.4%と高い割合を示した。このことより、これらが里地景観形成のテーマとして位置付けられているといえる。

3) 景観形成施策では、「建築物等の周辺環境と調和した配置・形態」(54.8%)など自然環境と「ムラ」に相当する領域との調和を目的とした施策や、「農業緑地の保全」(32.3%)や「山林・樹林の保全」(45.2%)など「ノラ」「ヤマ」に相当する領域との保全に関する施策が多く見られ、「ムラ」「ノラ」「ヤマ」の三領域を一体に捉えた、里地特有のトータルデザインの意図が見られる。しかし、目標・施策において三領域の一体性について明示していた例は少ない。

4) 里地景観の特徴を際立たせると考えられる、五感性に配慮した音や香りを対象とした施策は、「小鳥のさえずりや香りへの配慮」や「鐘の音・あいさつが聞こえる環境づくり」が、9.7%の市町村でみられたのみであった。また、グリーンツーリズムやエコツーリズムに対応する施策も、「自然観察場の整備」や「地元産業の体験場の整備」

など、6.5%の市町村の策定のみにとどまった。

5) 景観推進方策では、「広報・PR活動の実施」(74.2%)など住民意識の向上を目的とした行政主導型の施策が中心であり、「住民との懇談会・ワークショップ等の開設」(22.6%)など住民の意見の反映を目的とした施策は少なかった。また、「市町村景観条例の制定・活用」(58.1%)が高いことから、景観形成にあたっての積極的な規制が行われているといえる。

以上の結果より、里地型市町村の景観形成基本計画の課題を以下に示す。

既述のように、里地の原型は、ムラ・ノラ・ヤマの三領域がもたらす空間にあると考えられる。人と自然の共生空間である三領域を包括した総合的環境を考えることによって、初めて里地の概念が成り立つ。つまり、里地の魅力はその有機的な一体性にあり、三領域相互のバランスある存在が魅力ある里地景観醸成の必要条件となる。景観施策が単発的、局所的に終わらないためにもこの視点は不可欠である。また、里地の特徴を際立たせる、音や香りも対象とした五感性にもとづく計画の策定が望まれ、そのための基礎調査として、里地の多様な景観資源を的確に把握するためにも、複数の調査手法による構造的な解析を行うなど、住民に対するイメージ調査の重要性が挙げられる。特に、里地景観形成計画は、その分析に基づき体系的に展開されていく必要がある。

補注

注1) 樋口¹⁾は、景観を人間の精神的側面と外部の物的な環境の側面との相互作用であるとしており、つまりは景観とはその地域の文化を端的に表す表象現象と考えることができる。そのため、ここでは「里地景観」を「里地の文化現象の総体」とした。

注2) 景観施策に取り組んでいる各自治体によって、その計画の名称は種々であるが、本論では景観形成にあたってのマスタープランに相当する計画ということで「景観形成基本計画」として名称を統一した。

注3) 計画によっては地区別にも景観施策を詳細に明示している場合があるが、ここでは基準を統一するため、各市町村の全域を対象とした景観施策を

抽出した。

注4) 水や緑など、自然に親しむ空間の整備施策を、ここでは“親自然場の整備”としてまとめた。

参考文献

- 1) 福田アジオ (1980) : 「村落領域論」, 武蔵大学人文学会雑誌 2-2, pp. 217-247.
- 2) 福島康記 (1982) : 「放置されている里山をどう生かすか—わが国の土地利用における傾斜地の問題—」, 農業土木学会誌 vol. 50 (11), pp. 923-928.
- 3) 八坂通泰, 須永由紀, 川崎文主, 紺野康夫 (1994) : 「森林の孤立化が3種の多年草の結果率にあたえる影響」, 日本生態学会誌 vol. 44, pp. 1-7.
- 4) 井手任 (1992) : 「生物相保全のための農村緑地配置に関する生態学的研究」, 緑地学研究 11, pp. 120, 東京大学農学部緑地学研究室。
- 5) 服部保, 赤松弘治, 武田義明, 小館哲治, 上南木昭春, 山崎寛 (1995) : 「里山の現状と里山管理, 人と自然 6」, pp. 1-32.
- 6) 安藤昭, 佐々木貴弘, 赤谷隆一 (1994) : 「全国71都市を対象とした都市景観計画に関する実証的研究」, 土木学会第49回年次学術講演会講演概要集第4部, pp. 978-979.
- 7) 環境庁 (1996) : 「里地からの変革」, pp. 11-33.
- 8) 環境庁 (1996) : 「里地自然地域等自然環境保全調査」, pp. 1-7.
- 9) 安藤昭, 佐々木貴弘, 赤谷隆一, 佐々木栄洋 (1997) : 「住民・転出者・来訪者からみた岩手県中山間地

域における町のイメージ構造—岩手県軽米町を対象として—」, 第32回日本都市計画学会学術研究論文集, pp. 475-480.

- 10) 中岡良司, 今尚之, 佐藤慶一, 五十嵐日出夫 (1995) : 「アンケート調査における文章回答の統計処理に関する研究」, 土木計画学研究講演集 No. 17, pp. 101-104.
- 11) 樋口忠彦 (1975) : 「景観の構造」, pp. 6, 技法堂出版。
- 12) 田村憲美 (1985) : 「畿内中世村落の“領域”と百姓」, 歴史学研究 547, pp. 79-88.
- 13) 日本村落史講座編集委員会 (1990) : 「日本村落史講座第2巻景観 1」, 雄山閣出版, pp. 305-314.
- 14) 安藤昭, 赤谷隆一, 須藤孝治 (1995) : 「盛岡市におけるサウンドスケープに関する記憶素材の採取」, 土木学会第50回年次学術講演会講演概要集第4部, 土木学会編, pp. 984-985.
- 15) 安藤昭, 赤谷隆一, 佐々木貴弘, 須藤孝治, 駒井拓也 (1996) : 「快適音から連想される風景のイメージに関する一考察」, 土木計画学研究講演集 No. 19 (2), pp. 441-444.
- 16) 安藤昭, 赤谷隆一, 佐々木貴弘, 奈良礼子 (1998) : 「三陸沿岸域の町の匂いのサンプリング—岩手県山田町を対象として—」, 土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集, pp. 374-375.

なお、本稿は岩手県59市町村の景観形成基本計画を資料として用いた。

The aim of this paper is to definite the problem about conservation and the rearing of the landscape of Satochi, through the analysis of landscape master plans of Satochi-type towns in Iwate prefecture.

Subjects of analysis of landscape master plans are as follows : 1) Method of data survey of landscape, 2) Fundamental object of landscape planning, 3) Measure of landscape planning, 4) Measure of pushing on with landscape planning.

As the results, we made clear the actualities of landscape master plans of Satochi-type towns, and we could give guide of conservation and the rearing of the landscape of Satochi.

Key Word : 1) landscape master plan, 2) Satochi, 3) conservation and rearing

(1999年10月19日 受理)

(2000年9月25日 再受理)